（別紙の２）

自己評価及び外部評価票

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価（事業所記入） 実践状況	外部評価（評価機関記入） 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	事務所に理念を掲示し、会議の際には声に出して読み上げているが、実践にはなかなか繋がってきていない。	事務所に3つの基本理念を掲示し、管理者が中心となり、月２回開催されるユニット会議等を通って、個人として、チームとして、実際の運営に反映出来るように働き掛けている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	現在新型コロナウイルスの影響もあり、地域社会との関わりは全く持てていない。買い物も職員が代行している。	コロナ禍以降、それまで招待状を頂くなど色々と交流のあった小学校、中学校、地域の文化祭、音楽会等に参加できない状況。また施設の周囲に民家がなく、日常的な交流が難しい立地でもある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	地域社会との関わりがないため、活かすことができていない。以前は福祉大学の実習や高校生の福祉体験学習を行ったが今年は行えていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこの意見をサービス向上に活かしている。	新型コロナウイルス対策の為、運営推進会議は書面での報告という形で行っており、話し合いは行われていない。	コロナ禍以降、運営推進会議は開催されておらず、4ヶ月に1度、運営状況などを書面にまとめ、参加予定者に報告されている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。	現在外部との関わりが全くないため、電話で現状の報告を行うのみである。	コロナ禍以降、運営推進会議が開催されていないこともあり、連携は専ら電話でのやり取りのみになっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	昼間は玄関の鍵を開けているが、職員が手薄になる時間帯等については一時的に施錠をしている。離設リスクがあるときはアセスメントを行い、なぜ外に行きたいのか考え対応している。	身体拘束に関する研修等を行い、管理者が中心となり身体拘束をしないケアの実践に努めている。玄関の鍵は、職員の手薄になる時間のみ一時的に施錠しているが、リスクに対しては職員間で話し合いを行い、身体拘束せず、ケアで対応出来るように取り組まれている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている。	高齢者虐待関連防止法については施設内研修を行い常に注意を払っている。職員同士で注意しているが直接言えないときは管理者に報告してもらい、その経緯を聞き取りながら自己啓発できるよう注意している。		

自己	外部	項　目	自己評価（事業所記入）	外部評価（評価機関記入）	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	権利擁護に関する研修は行えていない。現在は管理者のみで対応している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	入居前に面談を行い、その時大まかな説明をし、実際の契約の時にさらに細かい部分まで丁寧に説明し、理解を得られるようにしている。		
10	（6）	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	面談時や電話での相談を受け付けており、対応内容やその後の様子など随時伝えている。利用者の要望などは日々の生活の中から聞き出し、反映できるようにしている。	利用者には日々の生活を通して、家族には面談時や電話での際に、意見や要望を常に把握できるように接している。最近では、家族からの要望で面会の規制を緩和するなど、運営に反映できるよう努めている。	定期的に、利用者家族全員に、近況や運営状況を報告し、要望などを吸い上げる機会を設けるなどの取り組みを期待する。
11	（7）	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	意見や提案を聞き上司へ報告しているが、その後のトップダウンがなかなか無く現場に反映するまでに時間がかかっている。	管理者が中心となり、ユニットごとに無記名で提出できる意見ボックスを設置。職員一人ひとりの声を集めて運営に反映させようと努力されている。最近では、職員から、利用者との外出を容易にするべく、グループホーム専用車を希望する声があり、調整に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	努力が、数値や結果で必ずしも出るわけではなく、やりがいや向上心が廃れていっている職員も中にはいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	外部研修の機会は与えてもらえているが、新型コロナウイルスのために外部研修自体の開催が無く、機会が減った。3年以上の職員には介護福祉士の受験を勧めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	同業者と交流する機会は全くない。		

自己	外部	項　目	自己評価（事業所記入） 実践状況	外部評価（評価機関記入） 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	まずは不安の軽減目的として、職員から自己紹介するよう努めている。その後も本人の意見を聞きながら生活のリズムを掴むようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	家族等には、利用者本人の気持ちや状態、それに対して施設で行えることや新しい試みについて報告し、一緒に環境を考えていくようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	グループホームへの入所相談の際にご本人やご家族の希望を聞き、まずは自社グループ施設において必要な支援ができる施設を相談させてもらっている。対応できないときは外部との連携相談も行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	支援と介護の比重において介護の方が多いため、利用者の中には仕事は職員がやるものだと思っている方もいる。暮らしを共に、については実践できていない部分がある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	ご家族とはご本人について細目に相談し、一緒に考えるよう努めている。現在は面会に制限があるが、距離を置いた面会や電話を使った対応等に協力して頂いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	現在は新型コロナウイルスのため外出や面会に制限をしながらの対応となっている。	新型コロナの5類移行に伴い、感染対応も徐々に緩和されており、現在は玄関での面会、家族との外出は可能となっている。今後は居室での面会が検討されている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	テーブル席の配置やレクリエーションに力を入れて、利用者同士が集まれる環境づくりに努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	グループホームから退去された方にも相談窓口を開き、相談に乗っている。		

自己	外部	項　目	自己評価（事業所記入）	外部評価（評価機関記入）	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	一人ひとりの想いや暮らし方について把握しきれていない。日々の生活の中や今までの暮らしぶり、ご家族からのお話から推測し対応している。職員本位にならないよう気を配っている。	入居時から24時間シートを使い、本人及び家族から情報を収集。思いや意向の把握に努め、実際のケアに反映している。食の希望も多いらしく、回転寿司などの外食にお連れするなど、実際の支援に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	事前面談の際やその後も、ご家族との面談時に今までどういった生活をしてきたのか伺うようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	24時間シートを活用しながら一人ひとりの暮らし方について、月2回のユニット会議で現状把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	本人や家族からは日々の会話の中や面談の際に、家での生活などを聞き取るよう心掛けている。得た情報に関しては24時間シートや生活サポート記録に記録し、ケアプラン作成の際に活用している。	ケアマネージャーが中心となり、利用者の担当職員、法人内の医師、看護師、理学療法士がチームで計画を作成している。アセスメントには24時間シートを利用。月2回のユニット会議で話し合い、3ヶ月に1回モニタリングされている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	24時間シートに即した生活サポート記録を使用し、日々のケアの様子やその時の様子などを記録し、見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	グループホームならではの特色を活かして、その日その瞬間のニーズをくみ取り、枠に捉われない支援やサービスの提供に心掛けているが、なかなか実践に繋げられていない。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	地域資源の情報は収集するよう努めているが、外出や訪問が難しいため実際には行えていない。		

自己	外部	項　目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	法人内の医師は週に1回往診を行っている。専門性が必要な場合には専門医を紹介し受診している。法人内の医師はグループホームで対応しているが、外部の病院にはご家族で対応して頂いている。	基本的に掛かりつけ医は、利用者、家族が選択することが出来る。外部の医師にした場合、受診等の対応は原則家族対応となる。法人内の医師は週1回往診を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	日々の様子を看護師に相談し、その都度指示を仰ぐようにしている。判断に困る場合はすぐに主治医へ連絡し、相談できるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院の相談室と連携し、入院前の様子や入院中の様子、退院に向けての調整や退院後のフォロー体制を相談しながら行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	契約時に、事業所で行えるターミナルケアについて説明を行っているが、実際に体調不良になった際にも再度説明し、ご家族の意向に沿えない際には他施設を紹介する等のフォローを行っている。	まず入所時に、当グループホームで行えるターミナルケアについて説明し、重度化した際に再度説明し話し合いを行う。ここ最近は看取りはなく、前回は約3年前となる。重度化された場合、多くは入浴設備等の整った法人内の他施設に移られている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	緊急時の対応についてはマニュアルを用意しているが、体調不良のご利用者がいる際にはその都度様子を鑑みて対応を伝達している。応急手当等の訓練については行えていない。実践力に関しては職員で格差がある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	防災訓練は年に2回行っているが、地域との連携においては行えていない。地域の避難場所等は最寄り以外は把握できていない。	本年度、年2回の避難訓練が計画されている。同敷地内にあるサテライト型小規模介護老人保健施設と合同で開催されている。水害が想定される地域のため、有事の際の避難方法等が決められている。	実際に、利用者と共に、施設外へ避難する訓練の実施に取り組むことを期待する。

自己	外部	項　目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	ご本人の今までの人生や性格を考慮し、職員本位のサービスにならないよう努めている。排泄の声掛けなどは本人の耳元で対応し尊厳の保持に努めている。	管理者が中心となり、月2回開催される各ユニットごとの会議において、個人を尊重し、プライバシーに配慮した対応が取れるよう職員同士で話し合って、チームとして改善を図っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	まずは利用者との関わりの中から、希望を聞きだしたり、把握に努めている。また、「いかがですか？」「どういたしましょう？」等本人が決定できる声掛けを行うように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	一人ひとりの意向に沿って支援を行うよう心掛けているが、外出が出来ない事で希望に沿えない事もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	洋服を一緒に選んだり、身だしなみを整えてからお部屋を出るように支援している。現在は、訪問カットの為2か月に一回、美容師に来てもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている。	毎回はできていないが、個々の長所を活かし、皆で協力しながら食事の準備から片付けまでを行っている。	食事はすべて各ユニットでの手作りとなっており、利用者が各々の能力により調理、盛り付け、片付けに参加されている。訪問時も利用者が調理に参加されていた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	一日の食事量や水分量を記録し、毎日確保できているかを常に視野に入れながら支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	その方の口腔ケア習慣に合わせた支援を行っている。週に1回は義歯洗浄剤を使用し、清潔の保持に努めている。現在歯科往診は行っていない。		

自己	外部	項　目	自己評価（事業所記入）	外部評価（評価機関記入）	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	排尿パターンの把握をし、なるべく失禁しないようトイレへの誘導や自分で付け替えられるようなパットの検討、上げ下げしやすいリハビリパンツや布パンツの検討など、失禁パターンから検討するようにしている。	失禁せずトイレで排尿することが出来るように、排尿記録を基に事前に誘導したり、パットの交換回数やサイズが適正になるよう支援されている。それにより布パンツに移行したり、日中のパット交換が少なくなる方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	下剤に頼らず、食事に食物繊維や乳酸菌を取り入れ、苦痛なく排便が行えるよう医師・看護師と相談しながら行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	ご本人の入りたい時間を相談し、なるべくそれに沿った対応を心がけている。基本的な曜日は設定しているがその日の気分で入れるように努めている。	檜で作られた浴槽のある浴室は、家庭サイズで広すぎず、冬場も快適に利用できる。 各々入浴日は決められているが、その日の体調や気分で臨機応変に変更されている。 重度者用のリフトはないが、研修で移乗技術を身に付け対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	居室はいつでも休めるようにしてあり、リビングでウトウトしていた際には声をかけ誘導している。畳スペースやソファーなども活用し、くつろげる場所を増やすようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	内服薬の説明書をファイルにして、何の薬を飲んでいて、どのような効果や副作用があるかを見やすいようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	ご利用者の出来ることをアセスメントし、役割づくりをしたいができていない。趣味ややってきたこと、嗜好品などを本人や家族に伺いながら用意し、対応している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	現在施設敷地内の散歩と車でのドライブのみを行っており、人の集まる場所の場合は十分な距離を保った上で楽しむようにしている。	敷地内に、樹々、花、畑がある広い中庭があり、安全に散歩が楽しめるようになっている。 またコロナ禍以降、フロアから伸びるウッドデッキを拡張し、気軽に外気に触れられるようにしてある。コロナ禍においても、ドライブや人混みを避けた外出を継続されてきた。	

自己	外部	項　目	自己評価（事業所記入） 実践状況	外部評価（評価機関記入） 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	お一人毎財布を用意し、お小遣いをあずかり、そのなかで本人が希望したものは購入をしている。現在は一緒に買い物に出られない為、職員が対応している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	携帯電話の使える方は持参している。また、本人から希望があればご家族へ電話をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	リビングの設えや季節の花、音楽やテレビの音量などに気を配り、くつろげる環境やみんなで楽しめる環境など、その時々にあわせた環境作りをしている。	外装・内観とも、京都をイメージしたような純和風で、落ち着いた設えで居心地が良い。床や手すりが木製で木のぬくもりが感じられる。各居室には、木目で毛筆体の表札が掛けられ自宅の雰囲気を作る。廊下の一角にソファーが置かれ、一人で静かに過ごせる共用空間がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	一人でくつろぎたい方や仲のいい方同士で一緒になれるよう配席に留意している。違う席に座ると怒りだす利用者がいるため、席は固定している。歌レクの時だけは移動できる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	本人、家族と相談し、自宅から思い思いの物を持参したり、活動の中で作ったものを飾ったりとそれぞれの部屋作りをしている。	箪笥等の家具は施設で用意されていないため、基本的に自宅で使っていた使い慣れた家具が持ち込まれており、コタツや想い出の装飾品等により、自宅のお部屋と見紛うような居心地の良い空間作りがされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	ご本人が使いやすい事、こだわりのある事などを鑑みて、表示や明るさ、使いやすさを考慮し環境を変えている。		